

Title	開始の「～出す」「～始める」について： 小説作品における用例分析を通して前接する動詞の傾向を探る
Sub Title	
Author	山口, 真紀(Yamaguchi, Maki)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2009
Jtitle	三田國文 No.49 (2009. 6) ,p.1- 16
JaLC DOI	10.14991/002.20090600-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20090600-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20090600-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 開始の「く出す」「く始める」について

小説作品における用例分析を通して前接する動詞の傾向を探る

山口 真紀

## 一 はじめに

日本語を学ぶ留学生にとって、いわゆる複合動詞の習得は難しいとされてきたが、今回、開始を表す「く出す」と「く始める」の違いを取り上げたのは、既に指摘されているように、両者の使い分けが非常に難しいということを教育の現場において稿者も実感しているためである。国立国語研究所の『複合動詞資料集』（一九八七年）によれば、「く出す」は複合動詞後項として最も頻度が高いもののひとつであり、学習者の目にとまる機会が多い。しかし、例えば、「雪が降り出した」と「雪が降り始めた」がどう違うのかといった学生からの質問に対し、未だ十分な説明が得られていない。

語彙の習得を目指す現場の指導においては、学習者にわかりやすく両者を差別化して示す必要がある。ここで言う差別化とは、すなわち、対象とする語に何らかの用法上の「限定」を与えることである。これには大きく分けて二つのアプローチがあると考えられる。ひとつは、両者の意味の違いから考える意味上の「限定」であり、もうひとつは結合条件や形態的特徴など語彙の表面的な「形」の部分に着目した、形式上の「限定」である。両者は表裏一体の関係で、常にその連続性が示唆される

ものであり、両者を満たしてこそ十分に「違い」を説明することができる。日本語の語感を持たない学習者は、教師によって示されるこのような「限定」をルールとして一般化し、実際の運用を行う際のひとつの助けとしていえると考えられる。

本稿ではこのような立場から、両表現の違いを明らかにすることを目指し、その第一歩として、「形」の部分の、とりわけ前接する動詞に焦点を絞り、調査・分析を行った。

## 二 先行研究

両表現に前接する動詞の特徴は、いくつかの先行研究において既に言及されている。

寺村氏は「くハジメルとくダスは多く同一の語に付き、意味もほとんど変わらない」と一般的な傾向を示されたが、後に「くハジメルと、くダスは、開始を表わす用法としてはほとんど重なるが、一方が自然で、他方が不自然な場合もわずかだが見出される」とし、次のような例を挙げておられる。

・ 赤チヤンガワツト 泣キダシタ \*泣キハジメタ  
・ 私ガソウ言ウト、先生ハ急ニ笑イダシマシタ ?  
・ 笑イハジメマシタ

・ 外ガダンダン暗ク ?ナリダシタ ナリハジメタ

・ オ腹ガスイテキタカラ、オ父サンハマダダケレド

\*食ベダソウ 食ベハジメヨウ

そして、「くハジメルは、一般に、笑ウ、泣ク、腹ガ立ツ、ムシヤクシヤスル、など、人の心身の動きで、反射的な、自分でコントロールできないようなものには使えないようである。オドロク、ガツカリスルなど、「一時的な気の動き」を表わすものには、くハジメルもくダスも使えない」と述べておられる。

また、姫野氏は、「感情の動きを表わす語や音の自然発生をあらわすような語」は「出す」のほうに適しているとし、以下の語をあげておられる。

怒る(怒りだす ?怒り始める) うろたえる まごつく  
ためらう しょげる 照れる はにかむ めんくらう あ  
きれる たまげる 気が滅入る 体が震える 苦しむ 痛  
がる 嫌がる

山崎氏は、小説・随筆・新聞等の言語資料(著作十一冊、新聞約三か月分)を対象にした調査をもとに、前接する動詞の傾向を分析しておられる。「く始める」に前接する動詞には「言語活動や思考活動など人の心理的な活動を表す動詞や変化や自然現象としての物の状態を表す動詞」が多いとし、「く出す」の場合は「言語活動及び自己運動としての動作・変化(空間的な移動やふるまい)を表す動詞や自然現象としての物の運動や

状態を表す動詞」が多いとされる。これは大筋において寺村氏、姫野氏の説を裏付ける結果となつてゐる。

この他、前接する動詞の自他という視点から述べられた、寺村氏、山崎氏、益岡・田窪氏の論考があるが、今回はこの点についての調査は行わないため割愛した。

### 三 調査方法

一八九八年以降に発表された日本語母語話者によつて書かれた日本語による小説作品から選び出した四十三作品より用例を収集した。分析は電子版を含む原作品によつた。以下、初出、および今回分析に用いた底本を記す。

『不如帰』徳富蘆花(初出)一八九八年一月く九九年五月「国民新聞」(分析)『小説 不如帰』岩波書店 岩波文庫一九三八年版を底本とする青空文庫を使用

『野菊の墓』伊藤左千夫(初出)一九〇六年一月「ホトトギス」(分析)『日本文学全集別巻1 現代名作集』河出書房新社一九七四年版を底本とする青空文庫を使用

『阿部一族』森陽外(初出)一九一三年一月「中央公論」(分析)『日本の文学3 森陽外(二)』中央公論社一九七二年版を底本とする青空文庫を使用

『こころ』夏目漱石(初出)一九一四年四月く八月「朝日新聞」(分析)『こころ』集英社 集英社文庫一九九一年版を底本とする青空文庫を使用

『夜明け前』第一部(上)島崎藤村(初出)一九一五年四月く一九二一年一〇月「中央公論」(分析)『夜明け前 第一

部(上)』岩波書店 岩波文庫一九六九年版を底本とする青空文庫を使用<sup>13)</sup>

『淡江抽斉』森鷗外(初出)一九一六年三月〜一九一八年五月  
「東京日日新聞」 「大阪毎日新聞」 (分析) 『淡江抽斉』岩波書店 岩波文庫一九三八年版を底本とする青空文庫を使用

『杜子春』芥川龍之介(初出)一九二〇年七月「赤い鳥」(分析) 『蜘蛛の糸・杜子春』新潮社 新潮文庫一九六八年版を底本とする青空文庫を使用

『セメント樽の中の手紙』葉山嘉樹(初出)一九二六年一月「文芸戦線」 (分析) 『全集・現代文学の発見・第一巻 最初の衝撃』学芸書林一九六八年版を底本とする青空文庫を使用

『河童』芥川龍之介(初出)一九二七年三月「改造」 (分析) 『河童・ある阿呆の一生』旺文社 旺文社文庫一九六六年版を底本とする青空文庫を使用

『山月記』中島敦(初出)一九四二年二月「文学界」 (分析) 『李陵・山月記』新潮社 新潮文庫一九六九年版を底本とする青空文庫を使用

『夏の花』原民喜(初出)一九四七年六月「三田文学」 (分析) 『夏の花・心願の国』新潮社 新潮文庫一九七三年版を底本とする青空文庫を使用

『斜陽』太宰治(初出)一九四七年七月〜一〇月「新潮」 (分析) 『斜陽』新潮社 新潮文庫一九五〇年版を底本とする青空文庫を使用

『晚菊』林芙美子(初出)一九五八年十一月「別冊文藝春秋」(分析) 『短篇小説名作選』現代企画室一九八一年版を底本とする青空文庫を使用

『総司はひとり』戸部新十郎(初出)一九七二年七月 青樹社(分析) 一九九〇年五月 徳間書店

『赤い帆船(クルーザー)』西村京太郎(初出)一九七三年八月 光文社 カツパノベルズ (分析) 二〇〇五年一月二八日 光文社電子書店

『日本沈没』(上)(下)小松左京(初出)一九七三年三月 光文社 (分析) 二〇〇一年九月 光文社電子書店

『お江戸探索御用(上)』迷路の巻』多岐川恭(初出)一九七六年六月 桃源社 (分析) 一九九四年一月 徳間書店

『北町奉行・定廻り同心控』笹沢左保(初出)一九八一年八月一三日号〜一九八二年三月一八日号「週刊サンケイ」 『同心 曉蘭之助』改題 (分析) 二〇〇四年四月 祥伝社電子書店

『炎の花』落合恵子(初出)一九八三年六月九日号〜一九八五年四月三〇日号「女性自身」 光文社 (分析) 一九九八年七月一五日 光文社電子書店

『星影のステラ』林真理子(初出)一九八四年一月号「野生時代」 角川書店 (分析) 一九八六年一月 角川書店 角川文庫

『広島に原爆を落とす日』つかこうへい(初出)一九八六年八月一一日号「野生時代」 角川書店 (分析) 二〇〇五年七月二二日 光文社電子書店

『十三の墓標』内田康夫(初出)一九八七年七月 双葉社 双葉ノベルズ (分析)二〇〇四年三月一二日 双葉社電子書店

『千利休・などの殺人事件』山村美沙(初出)一九八九年一〜一二月号「週刊宝石」 光文社 (分析)二〇〇四年二月二七日 光文社電子書店

『三毛猫ホームズの黄昏ホテル』赤川次郎(初出)一九九〇年五〜八月号「小説宝石」 光文社 (分析)二〇〇三年九月二六日 光文社電子書店

『ずばら』田辺聖子(初出)一九九二年一二月号「小説宝石」 光文社

『鬼が餅つく』田辺聖子(初出)一九九三年三月号「小説宝石」 光文社

『りんりん』田辺聖子(初出)一九九四年一〇月号「小説宝石」 光文社

『四人め』田辺聖子(初出)一九九三年一〇月号「小説宝石」 光文社

『ベッドと家霊』田辺聖子(初出)一九九四年六月号「小説宝石」 光文社

『古文の犬』田辺聖子(初出)一九九四年一〇月号「小説宝石」 光文社

右記六作品 (分析)『ずばら』二〇〇六年四月 光文社電子書店

『ピンク・パス』角田光代(初出)一九九三年 六月号「海燕」 福武書店 (分析)二〇〇四年六月 角川書店 角川文庫

『機関車先生』伊集院静(初出)一九九二年一月〜十月「ROCKET」 講談社 (分析)一九九七年六月 講談社 講談社文庫

『オープンハウス』辻 仁成 より「オープンハウス」(初出)一九九三年七月「三田文学」夏季号 (分析)一九九八年三月 集英社 集英社文庫

『銀行喰い』大下英治(初出)一九九五年 実業之日本社 ジョイノベルズ (分析)二〇〇四年四月 光文社電子書店

『ぼくのTV支配(ジャック)マニュアル』宗田理(初出)一九九七年二月 光文社 光文社文庫 (分析)二〇〇六年六月二三日 光文社電子書店

『三人の悪党くきんぴか(1)』浅田次郎(初出)一九九二年一月 天山社 天山ノベルズ 『きんぴか 痛快小説』改題 (分析)二〇〇二年一月二五日 光文社電子書店

『真田幸村の妻』阿井景子(初出)二〇〇一年十月 光文社 光文社文庫 (分析)二〇〇五年一月二八日 光文社電子書店

『ラストライド』石田衣良(初出)二〇〇一年一月「小説現代」 講談社

『ラストホーム』石田衣良(初出)二〇〇三年二月「小説現代」 講談社

右記二作品 (分析)『LAST』二〇〇五年八月 講談社 講談社文庫

『独楽の回転』小池真理子(初出)一九九二年七月「RO」 光文社

『災厄の犬』小池真理子(初出)一九九三年一月「RO」 光文社





85	抱く(2)	106	混じる(2)	107	増す(2)
84	染める(2)	105	舞う(2)	108	またたく(2)
83	増加する(2)	104	減る(2)	109	見せる(2)
82	進む(2)	103	吹き出す(2)	110	目立つ(2)
81	白む(2)	102	流行る(2)	111	燃える(2)
80	集中する(2)	101	発達する(2)	112	持つ(2)
79	沈む(2)	100	働く(2)	113	揺れる(2)
78	ざわざわする(2)	99	入る(2)	114	横切る(2)
77	殺到する(2)	98	登る(2)	115	悪くなる(2)
76	痙攣する(2)	97	上る(2)		
75	暮れる(2)	96	脱ぐ(2)		
74	下る(2)	95	鈍る(2)		
73	着替える(2)	94	鳴く(2)		
72	考える(2)		(2)		
71	通う(2)	93	取る(リズムを)		
70	がぶる(2)	92	撮る(2)		
69	活発化する(2)	91	取り戻す(2)		
68	駆けおりする(2)	90	解く(2)		
67	かかる(2)	89	勤める(2)		
66	降りる(2)	88	つける(2)		
65	泳ぐ(2)	87	漂う(2)		
64	落ちる(2)	86	称える(2)		

行ったり来たりす	活動する・奏でる・か	順調になる・紹介す
入れる・浮く・揺	られる・枯れる・渴	る・上下する・上昇す
渦巻く・疑う・疑	く・交わす・聞き込	る・調べる・じりじり
わなくなる・疑る・打	む・聞く・萌す・きし	する・知る・真剣にな
ち合わせる・うつら	う・逆転する・急高騰	する・深刻化する・侵入
つらする・映る・唸	る・着る・切れる・	なる・吸う・すく・少
う・うまくいなくな	る・着る・切れる・	なる・すすり泣く・す
る・売られる・潤む・	吟じる・食う・腐る・	べらせる・すべる・す
うるたえる・うわさ	くすぶる・口ずさむ・	る(音が)・ずれる・
れる・炎上する・大騒	暗くなる・暮らす・ぐ	る・説明する・せまる・責
ぎする・覆われる・起	らつく・来る・狂う・	める・続出する・測定
きる・送る・抑える・	警戒する・けいれんさ	する・揃える・高ま
おさまる・教える・落	せる・消す・顕著にな	る・たたかれる・たち
とす・衰える・帯び	る・講ずる・硬直す	る・たかめる・建てる・辿
る・おろす・回転す	る・合流する・濃くす	こめる・建てる・辿
る・買い取る・買う・	る・こだまさせる・ご	る・探索する・近づ
る・買取る・かく(い	びきてる・こぼれる・混	く・地球規模になる・
を)・書く・掻く・描	む・捜す・下がる・さ	治する・調査する・跳
く(かく)・嗅ぐ・か	さやかれる・ささや	梁する・ちらつく・沈
ける・下降する・重	く・さす・悟る・自	没する・つく・突つ
る・霞む・肩入れす	覚する・しのびよる・	く・包む・呈する・で
る・語りかける・	しめす・出現する・	きる・手伝う・

点検する・怒鳴る・飛ばす・飛ぶ・とめなくなる・灯る・取り上げられる・とりつかれる・とる(食事を)・流す・泣きじやくる・啼く・投げつける・撫で回す・撫でる・波打つ・悩まされる・悩む・習う・慣れる・悩む・習う・慣れる・南下する・滲む・縫う・濡らす・練る・覗く・のたうつ・呑み込む・はつきりする・放つ・はやし立てる・払う・冷える・光る・引き合う・ひきかえす・引き返す・ひく(潮が)・ひく(糸を)・引く(注目を)・開く・ふき上げる・拭く・膨らむ・	浮上する・物色する・不能になる・踏み鳴らす・ふりそそぐ・勉強する・奉仕する・暴走する・ほえる・ほじいたり結んだりする・掘る・本格化する・奔走する・まきこむ・まどする・まわす・廻る・見え隠れする・磨く・める・めぐる・もてあそぶ・戻す・戻る・物心つく・もみほぐす・洩れる・厄介になる・やれる・垂む・揺さぶる・揺れ動く・横たわる・読み上げる・流行する・流布する・わかれる・湧く・笑う・
	全三五七種類

(一) 両表現に共通して現れた動詞について

今回収集した用例の中から五例以上出現した語を取り上げ比較してみた結果、出現頻度には差があるものの、共通する語が一一語あった。両表現が同一の語に接続する傾向にあることは、寺村氏により既に指摘されていたが、今回の結果では次に示すように多くがいわゆる「自動詞」とされるものであった。

歩く(九七・一七) 走る(五三・五) 泣く(四八・五) 動く(三二・一二) 降る(二六・五) 話す(二二・七) 鳴る(一〇・八) 喋る(六・五) 流れる(六・九) 吹く(六・六) 聞こえる(五・七)

\* (一) 内の上段は「く出す」の頻度数を下段は「く始める」の頻度数を表す。

(二) 前接する動詞の頻度について

表1と表2の結果を頻度の点から比較すると、「く出す」は一部の動詞に用例が集中していることに気づく。三〇例以上のものは「言う(一三二例)」、「歩く(九七例)」、「笑う(六九例)」、「走る(五三例)」、「泣く(四八例)」、「駆ける(四六例)」、「動く(三二例)」と七語あり、これだけでも全体の総用例数の約六二%を占める。一方「く始める」は、「歩く(一七例)」、「動く(一二例)」、「起こる(九例)」、「流れる(九例)」等が高順位のものであるが、頻度が一番高い「歩く」でも一七例にとどまり、反対に五例以下のものが五〇八例と全体の約八二%を占めた。「く出す」に見られたような一部の語についての集中的な使用は確認されず、「く始める」は「く出す」と反対の傾向にあることがわかった。

(三) 前接する動詞の形式について

次に、両表現にどのような形で動詞が前接しているかに着目する。表1、2の結果によれば、「く出す」はその語のほとんどが、「歩き出す」、「歌い出す」のような和語動詞<sup>1)</sup>一語の単純な連用形であるのに対し、「く始める」にはそれ以外の形も多く出現していた。具体的には、次の四つの形である。例文に続き、今回の調査より収集した動詞の一覧を示す。

1. 「発達し始める」、「演奏し始める」といったいわゆるサ変動詞。(七四例)

例(1) 犬の名前のことで娘たちが大騒ぎし始めた。亜紀子は父である貢に全権を委ねましょう、と提案した。名前など、どうでもいいような気がした。(『災厄の犬』)

例(2) スタート五分前。ふたたび号砲が鳴り、信号旗が掲げられると、二十一隻のクルーザーはいっせいに動き出し、スタートラインを行ったり来たりしはじめた。(『赤い帆船(クルーザー)』)

「く始める」に前接するサ変動詞一覧(算用数字は用例数を示す。記載のないものは1例を表す。)

移動する2 炎上する 演奏する2 回転する 下降する  
活動する 機能する 逆転する 警戒する 痙攣する3 硬直する 合流する 殺到する2 自覚する 集中する2  
出現する 紹介する 上下する 上昇する 侵入する 説明する 増加する2 続出する 測定する 探索する 調査する 跳梁する 沈没する 点検する 南下する 発達する2 浮上する 物色する 勉強する 奉仕する 暴走する 奔走する 流行する 流布する 急高騰する/活発化する2 深刻化する 本格化する/愛する 治する 呈

する/はつきりする/行き来する 大騒ぎする 肩入れする こだまする<sup>2)</sup> 見え隠れする/濃くする/電話をする 話をする 家のことをする 遊びをする 吉原通いをする/音がする/ざわざわする2 じりじりする うつらうつらする/行ったり来たりする ほどいたり結んだりする 右に見るように「演奏する」のような「漢語+する」のほか、「話をする」や「ざわざわする」、「行ったり来たりする」などさまざまな形が確認された。

2. 「歩き回り始める」、「買い取り始める」といった二語の複合動詞。(三二例) 全体としては三語の複合となる。

例(3) 杏子の目の中で、輝きを失った海が徐々にその色を取り戻し始めた。夕暮れの時間だった。あと小一時間もすれば、ケネスに会える。(『炎の花』)

### 「く始める」に前接する二語の複合動詞一覧

歩き回る2 打ち合わせる 買い取る 駆けおる2 語りかける 聞き込む しのびよる すすり泣く 取り上げる 取りつく 取り戻す2 泣きじゃくる 投げつける 撫で回す 飲み込む はやしたてる 引き合う 引き返す2 吹き上げる 吹き出す2 踏み鳴らす ふりそそぐ まきこむ もみほぐす 揺れ動く 読みあげる

3. 「響かせ始める」、「取り上げられ始める」といった前接する動詞にヴォイスが付着したもの。使役形、受身形ともに確認された。(一九例)

例(4) テレックスがカタカタと鳴り、凶形(パターン)受信用のファクシミリが、ジイジイパチパチとスパークの音をひびかせはじめたが、みんなは椅子に腰かけたまま、動か

なかった。(『日本沈没』)

「く始める」に前接する使役形・受身形動詞一覽

売られる うわさされる 覆われる 行われる<sup>2</sup> 感じられる ささやかれる<sup>2</sup> たたかれる 唱えられる 取り上げられる 取りつかれる／(物と物を) 打ち合わせる 癒ませせる こだませせる 滑らせる 悩まされる 慣らされる 響かせる

4. 「大きくなり始める」、「地球規模になり始める」のような「形容詞・名詞+なる」の形。(一九例)

例(5)「そんなん、べつに片端から見て廻らんでも工やないか。」塩田はそろそろ酒の気が切れたのか、機嫌がわるくなりはじめている。(『ずぼら』)

なお、この形式については、今回収集した一九例のうち一七例が『日本沈没』からのものであった。作者(小松左京)に特徴的な表現と見ることのできるため、今後調査対象を広げ更に検討する必要がある。

「く始める」に前接する「くなる」をともなう表現一覽(\*は『日本沈没』からの用例)

- うまくいかなくなる\* スケールになる\*
- 止めなくなる\* 悪くなる<sup>2</sup>(1\*) 暗くなる\*
- 疑わなくなる\* 顕著になる\* 順調になる 暑くなる\*
- 少なくなる\* 真剣になる\* 浅くなる\*
- 大きくなる<sup>2</sup>\* 地球規模になる\* 熱くなる\*
- 不能になる\* 厄介になる

これらの表現は、「く出す」に前接する動詞についてもわずかであるが確認されている。このような形のものが全用例

(「く出す」七七〇例、「く始める」六二二例)に占める割合を各表現別にまとめたものが表3である。「く出す」は、これらの表現は全体の約五%しかなく、九四%以上が単純な和語動詞一語の連用形である。「く始める」は、約七七%が和語動詞一語の連用形であるものの、これらの形式のものが全体の約二三%を占め、「く出す」よりもこのような形の動詞の使用率が高く、前接する動詞のバリエーションが多いことがわかる。

表3 「く出す」「く始める」に前接する動詞の形式による比較

前接する動詞の形式	「く出す」頻度	割合%	「く始める」頻度	割合%
1. サ変動詞	20	2.5%	74 (23)	11.5%
2. 二語の複合動詞	7	0.9%	31	4.9%
3. 使役形・受身形	5	0.6%	19 (23)	3.0%
4. 「形容詞・名詞+なる」	9	1.1%	19	3.0%
5. 和語動詞一語の連用形	727	94.4%	481	71.3%
6. その他	2 (24)	0.2%	0	0%

## 五 「く出す」と意志表現

「く出す」と「く始める」の違いは、しばしば意志表現をどうかどうかという点からも説明される。森田氏は、「く出す」は「自身のことでも結果的に事実を叙する場合」に用いるとし、「自己の意志的判断」、例えば「そろそろ本を読み出そうか」とは言わない」と述べられ、姫野氏も「く出す」は「意志的表現にそぐわない」とし、次のような例を挙げておられる。

? 早くやりだせ：早くやり始めろ

? 今すぐ読みだしたい：今すぐ読み始めたい

? 今日中に論文を書き出しておこう：今日中に論文を書き

始めておこう

また、今井氏も、「すぐにその本を読み始めよう？ すぐにその本を読み出そう」、「すぐにその本を読み始めたい？ すぐにその本を読み出したい」、「早く食べ始めたい？ 早く食べ出したい」等の例文を挙げ、「く出す」は「命令、使役、意志の文脈で現れにくい」としている。そしてこの現象は「話者の判断や推論を表わすモダリティ形式と平行的である」とし、「らしい」「ようだ」「そうだ」などはこれらの文脈で現れないが、これは「モダリティ形式を含む文の話者が、命題が表現する事態に対して制御力を持っていないことに由来する」と述べておられる。日本語教師用の文法手引書である『初級を教える人のため日本語文法ハンドブック』(二〇〇六年)においても「く出す」は、「(3)のような意志表現とともにあまり使われません」とし、次の例文が挙げられている。

(3) 6時頃から料理を(作り始めよう/?) (作りだそう)。  
以上のように、開始の「く出す」は「く始める」と異なり、意志の表現をとりにくいことがその特徴として指摘されている。しかし、山崎氏は「自己の意志的表現を表す例があった」として次のような例を挙げておられる。

グレーの背広を着込んだ、頑丈そうな体つきの男がひどく自身ありげに、ほくに近づいてくる。男の表情がかにさわった。ぼくはくるりと後ろを向いて、歩き出そうとした。

確かにこれは、「く出す」の意志の表現であるといえる。これについては、「く出す」が「くましよう、くませんか、等の依頼、勧誘の表現」では現れないことから、これは特殊な例であるとの位置づけがなされている。

本調査においても、「歩き出そう」のような意志表現が見られた。確認されたのは、全一七例で次の三つの形に大別できる。

1. 「く出そう」。いわゆる意向形。(九例) 【内訳】：駆け

る 4 歩く 3 走る 1 笑う 1)

例(6) 小野寺の腕の後ろから、ぱつとび出すと、ヒステリックに叫びながら、ローターの回転をあげつつあるへりに向かって走り出そうとした。(『日本沈没』)

「く出そう」という表現は、今回の調査では「く出そうとする」という形で全て出現していた。

2. 「く出したい」。いわゆる願望形。(七例) 【内訳】：泣く 5

笑う 2)

例(7) サエコは急にはしを放り投げて泣き出したくなった。

(『ピンク・バス』)

例(8) 枯れ葉がハラハラと恨一郎と玲子の頭上に舞い落ちた。

恨一郎は泣きだしたかった。(『広島に原爆を落とす日』)

3. 「く出すつもりだ」(一例)【内訳】：「咲く1」

例(9)でも、私、これから咲き出すつもり、生きてゐる甲斐にね。(『晩菊』)

この例は意志表現と考えられるが、この場合は自分のことを花にたとえた比喩的な言い方で、小説作品独特の修辭的な色彩が強く感じられる。

以上、意志表現が確認された語は、「駆ける」、「走る」、「歩く」、「笑う」、「泣く」、「咲く」の六語であった。この中で「咲く」は例(9)に見たとおり、特殊な表現であることから除外して考えると、残りの動詞は全て「四、調査結果(二)前接する動詞の頻度について」のところで見つかり、「く出す」に前接する動詞としての出現頻度が高いものと重なるものであった。今回、対象作品の中からこれらのうち「言う」と「動く」については、意志表現を含む用例を収集できなかったが、次に示すような使用例もあり、この二つについても意志表現の使用は可能であると考えられる。

例(10)首相は通常国会終了直後の一日の記者会見でも「民営化準備を進めるための公社だ」という認識をもってもらい、本格的な郵政民営化に向け動き出したい」と述べ、自民党内の抵抗を押し切ることに自信を示した。(『産経新聞』)

二〇〇二年八月一日東京版朝刊)

例(11)シリーズ史上初となる予告先発について、岡田監督は会議後、「投手コーチと決めた。会議ではこちらから言い出そうと思っていた」と説明。「ファンのためになるし、戦略上もプラスになると思ってOKした。短期決戦だし、

こちらが不利になるとは考えてはいない」と言い切った。

(『産経新聞』二〇〇五年十月二二日東京版朝刊)

このように、「く出す」は、意志表現をとりにくいことが従来指摘されてきているが、「く出す」に前接する動詞でその使用の頻度が高いものについては意志の表現の使用が確認できた。更に、稿者の内省に基づけば、これらの表現は、特に不自然で使用が避けられるべきものではないように思われる。

なお、「く始める」の意志表現で今回確認されたものは一例であった。

## 六 まとめと考察

「く出す」と「く始める」に前接する動詞について小説作品における用例調査を行った結果、次のようなことが明らかになつた。

開始を表す「く出す」と「く始める」に前接する動詞に共通するものは、今回の調査では、「歩く」、「走る」、「泣く」、「動く」、「降る」、「話す」、「鳴る」、「喋る」、「流れる」、「吹く」、「聞こえる」であり、その大部分が自動詞であった。両表現にはこのように共通するものも存在したが、それ以上に各表現に前接する動詞について特徴的であったのは次のような傾向である。

「く始める」に前接する動詞は「く出す」に比べ、多種多様である。前接する動詞の種類そのものが多く、一部の動詞に偏つた使用は見られない。さらに個々の動詞の形に着目すると、いわゆるサ変動詞や、複合動詞、使役形、受身形といった動詞

の変化形も多く確認された。その意味で、「く始める」は、開始を表す造語成分として広い汎用性を持つ語であるといえる。

一方、「く出す」は、「く始める」とは対照的であった。前接する動詞の種類は「く始める」に比べ少なく、その大部分が和語動詞であり、サ変動詞や複合動詞その他の動詞の変化形が占める割合も少ない。「言う(二三例)」、「歩く(九七例)」、「笑う(六九例)」、「走る(五三例)」、「泣く(四八例)」、「駆ける(四六例)」、「動く(三八例)」といった自動詞を中心としたこれらの語に突出して用例が多く、極度の偏りが観察された。これは、「く出す」という表現がある種の決まった動詞についてかなりの頻度で繰り返し使われていることを意味している。「く出す」には慣用度がかなり高い組み合わせが存在しているといえそうである。

また、「く出す」は一般にとらえないとされる意志表現についても、これらの語については使用例が確認された。このことは、使用頻度の高さと関係があるのではないだろうか。使用範囲の広い「く始める」は開始を表す造語成分が付着した語であると見るのがふさわしいが、これらの場合はそのように見るよりも、むしろ一体化した語(一語)であると捕らえた方がいいのかもしれない。開始の「く出す」「く始める」を二語の複合と考えた場合に、「く出す」には「く始める」よりも前項、後項の結合度が強く、複合の進んだ段階に位置している語が存在すると考えられないだろうか。

以上のことを踏まえて日本語教育の現場における応用を考えた場合、次のようなことが考えられる。

一般的に両表現は開始を表す造語成分(複合動詞後項)として同列に学習者に提示されることが多いが、先に述べたように前接する動詞にはそれぞれに特徴的な傾向がある。よって、学習者にはそれを示した上で、広い範囲で使用可能な「く始める」を一般的な開始を表す造語成分として提示するのが望ましい。また、両表現の使い分けの一基準として示されている意志表現の使用の可否については、「く出す」の使用頻度の高い語(「歩き出す」、「笑い出す」など)については「くそうとする」「くたい」等の表現で使用可能であることを示すことも有効であると思われる。

## 七 今後の課題

今回は、小説作品という限られた資料を対象に、前接する動詞の形式に着目して調査を行った。「はじめに」とのころでも述べたが、両表現の違いを考えるに当たっては、これらの持つ意味の違いも考える必要がある。先行研究では、この点から両表現の使い分けに言及しているものもある<sup>31)</sup>。この点については、今後、副詞や形容詞を含む修飾成分、及び両表現が使われている文脈の調査から分析を試みたいと考えている。また、これと平行して、調査対象資料を更に広げていく必要がある。新聞記事や論説等対象とすべき言語資料は多く残されている。今後、現場の指導に活かすべく、更に多くの用例を収集し、総合的に検討していきたい。

注

- (1) 松田文子氏『日本語複合動詞の習得研究』(ひつじ書房 二〇〇四年)
- (2) 韓国語学習者の実態については白以然氏『複合動詞「〜出す」・「〜始める」の習得―韓国語を母語とする学習者の意識を中心に―』(『人間文化論叢 第8巻』お茶の水女子大学 二〇〇五年)に詳しい論考がある。
- (3) 『複合動詞資料集』(国立国語研究所 一九八七年)によれば複合動詞構成要素としての「〜出す」は「〜得る」と並び使用頻度第一位である。なお、ここでの「〜出す」には開始以外の意味を持つものも含まれる。
- (4) 松田文子氏は前掲書(注(1))において、複合動詞「〜こむ」の習得研究を行うに当たって、「母語話者と同じように適切な文を適切だと判断し、非適切文を非適切だと判断できること」を「語の意味を知っていること」と定義しておられる。
- (5) 寺村秀夫氏『活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト(1)』(『日本語・日本文化』大阪外国語大学 一九六九年)
- (6) 寺村秀夫氏『日本語のシntaxと意味Ⅱ』(くろしお出版 一九八四年)
- (7) なお、寺村氏の用例では、「ほとんどの日本人がおかしいと感じるもの」に「\*」を、「人によって判定がかなり違うもの」には「?」がつけられている。以降、引用した各論考においても、「?」が使われているが、これも同様に、人によって判断が分かれる、自然とは言い難い表現であることを示す記号である。
- (8) 姫野昌子氏『複合動詞の構造と意味用法』(ひつじ書房 一九九九年)

- (9) 山崎恵氏「開始の局面を取り立てる局面動詞について―「〜始める」・「〜出す」の用法比較―」(『阪田雪子先生古希記念論文集 日本語と日本語教育』三省堂 一九九五年)
- (10) 益岡隆志氏・田窪行則氏『基礎日本語文法―改訂版―』(くろしお出版 一九九二年)なお、寺村氏の論考は注(6)を、山崎氏の論考は注(9)を参照のこと。
- (11) 上級学習者が近代小説を読む可能性は十分にあることを考え、本調査では一八九八年を対象資料選定の上限と設定した。
- (12) 青空文庫のホームページアドレスは以下の通りである。  
<http://www.aozora.gr.jp/>
- (13) 『夜明け前』は、第一部(上)、第二部(上)、(下)が青空文庫で閲覧可能となっているが今回の調査では第一部(上)のみを使用した。
- (14) 『お江戸探案御用』は、(上)迷路の巻、(下)悪道の巻がシリーズとして既刊となっているが今回の調査では(上)迷路の巻のみを使用した。
- (15) 『三人の悪党〜きんぴか〜』は光文社文庫では(1)〜(3)が既刊となっているが光文社電子書店からは(1)のみの刊行となっているため、今回の調査では(1)のみを使用した。
- (16) ここでは、前接する動詞の基本形ではなく、出現した形式によって分類を行い、その終止形を表示した。よって、例えば「すべる」と「すべらせる」のような例は別語としてカウントされている。また、語の表記は、同じ意味用法と考えられるもので複数あるものについては代表的なもので統一したが、原則作品の表記に従った。
- (17) 注(18)に分類されるサ変動詞以外の動詞。
- (18) 『演奏する』のような「漢語+する」のものほか、「話をする」や「ざわざわする」、「行ったり来たりする」など「する」を含む語をここに分類する。

(19) ここには「痙攣させる」一例が含まれる。

(20) ここには「こだまさせる」一例が含まれる。

(21) 各形式について確認されたものは以下の通り。

1. 「く出す」に接続するサ変動詞一覧(算用数字は用例数。記載のないものは一例を表す。)

哀願する 圧迫する 殺到する 心配する 説明する 注目する  
連想する／云々する／顔をする 加勢をする 話をする する2  
(何をし出すか)／いらいらする2 そわそわする4／のつそつする  
奉公する

2. 「く出す」に接続する二語の複合動詞一覧

光り輝く2 嘆ぎ回る 立ちこめる 建ち並ぶ たてこむ 論じ合  
う

3. 「く出す」に接続する使役形・受身形動詞一覧

謡われる 覆われる おそわれる 思われる 騒がれる  
なお、「く出す」で確認できたものは全て受身形であった。

4. 「く出す」に接続する「くなる」をともなう表現一覧(\*は『日本沈没』からの用例)

暗くなる\* しげくなる 強くなる 歓迎されなくなる\* 貧乏に  
なる 気になる 噂になる 状態になる\* 満席になる\*

(22) おおよその割合を示す。小数点第二位以下は切り捨てた。

(23) ここには「こだまさせる」、「痙攣させる」の2例がサ変動詞であり、使役形でもあるためそれぞれ重複して含まれている。

(24) ここに含まれるのは、「くてしまふ」と「くてくる」を伴った表現である

・残りの時間が短くなると、修二の焦りは勢いを増して深くなつた。心が身体とずれてしまひだしたようだった。赤いブレーキランプを確認しているのに、危うく前のタクシーに追突しそうになる。

『ラストライド』

・この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まって来出しました。彼は自分以外に世界のある事を少しづつ悟ってゆくようでした。(『こころ』)

なお、このような表現は「く始める」については確認されなかった。

(25) 森田良行氏『基礎日本語辞典』(角川書店 一九九二年)

(26) 姫野昌子氏『複合動詞の構造と意味用法』(ひつじ書房 一九九九年)

(27) 今井忍氏『複合動詞の多義性に対する認知意味論によるアプローチ―「く出す」の起動の意味を中心にして―(一九九三年 『言語研究』

2 京都大学)

(28) 庵功雄氏・高梨信乃氏・中西久実子氏・山田敏弘氏『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク 二〇〇六年)

(29) 山崎恵氏『開始の局面を取り立てる局面動詞について―「く始める」「く出す」の用法比較―』(『阪田雪子先生古希記念論文集日本語と日本語教育』(三省堂 一九九五年)

(30) 用例を示す。

・三日前、料亭谷川で、鬼頭、熊井と会ったさい、熊井のいった言葉が忘れられなかった。

熊井は、日洋紡の株は儲かるといっていた。熊井から受け取った五億円で、さつそくその日洋紡株を買いはじめようというのだ。

(『銀行喰い』)

(31) 寺村秀夫氏は前掲論文(注(6))において、「くダスは、また、くハジメルよりも突然、だしぬけに、といった感じが強いように思われる」とし、「くハジメルは、一般に、笑ウ、泣ク、腹ガ立ツ、ムシヤクシヤスル、など、人の心身の動きで、反射的な、自分でコントロールできないようなものには使えないようである」と述べておられる。

森田良行氏は、「出す」が意志表現をとらないことの理由として、前掲書（注（20））において次のように述べておられる。

「出す」は「考え出す、思い出す」のように、事柄の発生、形成の意のある点、「始める」と異なる。「出す」は無の状態、現れていない状態のおおのずと顕任化し、動作・状態の変化として形をなすという気分が強い。開始よりは、新たな事態の成立の意識が強い。

また、姫野昌子氏も前掲書（注（8））において、同様に「出す」の持つ「突発性」、「不測性」に言及しておられる。

「出す」の基本的意味である「外部への移動」は、「開始」の場合にも意味の根底において引き継がれ、連続している。内部に込められていたものが、何かのきっかけからどつと外部に出て、ことが始まるという事態は容易に想像されることである。そこには、人為的な力の作用というよりは、内部からあふれた自然なエネルギーの流出が感じられる。

付記

本稿は、二〇〇六年度慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター日本語教育学講座修了論文の一部を修正・加筆し、再構成したものである。